

「命の泉はあなたにあり」

(詩篇 36 の 10)

命の泉はあなたにあり、私たちは、あなたの光にあって光を見る。

For with you is the fountain of life; in your light we see light.

人間にとって最も必要なのは、いのちである。このことは、だれでも知っていることであるが、その命というとき実に大きな意味の違いがある。単にこの体をささえる命のことなら、それは実にはかない。数十年でなくなるし、それはまた、一般の動物と同じものでしかない。

また、光を見るというときも、目に入ってくる光ということなら、神を信じるなどは関係なく入ってくる。

しかし、ここで言われているのは、そうした常識的なことでなく、目に見えない命、すなわち朽ちることのない命であり、人間だけに与えられる霊的な命のことである。また、見るということも、神の光の内においてはじめて見ると言われていることからわかるように、肉眼で見る光ではなく、やはり霊的な光のことである。

私たちがいくら身体に病気がなくとも、その心に大きな打撃を受けるとき生きていけなくなるのは、動物のような食物だけあれば十分に満足できる存在でないことを示している。

私たちに必要なのは、神の命、永遠に壊れることのない命なのである。そしてその命は神のいのちであるゆえに、泉のようにあふれでる。主イエスも、「私と与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水が湧き出る」(ヨハネ4の14)と言われた。

それに対して、この世は人間の心を枯らしていく傾向がある。幼いときには純真な心、すなおに身の回りのことに心を動かされる心があっても、それらは成長とともに枯れていくことが多い。毎日の新聞、あるいはいろいろなテレビドラマや小説などの類に触れて、それによって心がより真実さが与えられたり、だれでもに及ぶような真実な愛の心などが増えていくであろうか。多くの場合、そうではない。それらから発信される内容は、この世にあって枯れていった状況、罪深い姿を描くものが多いからである。

それは今に始まったことでなく、昔から、この世そのものがさまざまな人間関係、老齢、病気、生きる苦しきなどによって私たちの心を枯らしていく。

そうしたすべてを見抜いて、神はその枯れたところが泉のように変えられる力が存在するということを告げているのである。

「荒野よ喜べ、花を咲かせよ。…荒れ野に水が湧き出で、荒れ地に川が流れる。」（イザヤ書 35 章）

また、神の光を受けてはじめて、本当の光が見えるようになる。それまではこの世の見えるものいかに探求しても永遠の光というべきものがわからない。この世の実態を知れば知るほど、一人の人間の内面から、周囲の社会、そして世界にはさまざまな暗いものが見えてくる。

けれども、私たちがこの世界の創造主である愛の神を信じ、心から仰ぐだけで、太陽のように、また降り注ぐ雨のように与えられる神の光を受け、それによって、この世の移りゆく現実とその闇のただ中に永遠の光を見ることが出来る。この詩の作者はそのことを証している。それによって、すべての人の前途にある、死という闇のかなたにも、真実な永遠の光を見ることが与えられる。



ソバナ（罌粟・キキョウ科）
伊吹山 2010.8.6

ソバナは、夏の山地に時折見かける花で、その青紫のキキョウの仲間であることはすぐにわかります。名前のソバ（罌）とは、けわしい崖を意味する言葉で、この写真のソバナも崖で咲いていたものです。伊吹山は標高 1377m、それほど高いとは言えない山ですが、高山植物といえるものが多くみられます。しかし、このソバ

ナは伊吹山の頂上周辺にもほとんど見かけなくて、やや離れたところで見いだしたものです。ツリガネニンジンと似ていますが、ソバナは、葉が茎から互ちがいに出る（互生）に対して、ツリガネニンジンとは輪生であること、ソバナの花びらは先端が反り返らないなどの違いがあります。この花は、秋らしいさわやかな色合いと雰囲気なたたえています。近くに見える赤い茎と細い花は、アカソ（赤麻）といい、伊吹山では群落をなして広くみられます。一つ一つの花は、沈黙のなかに、声ならぬ声をもって語りかけていますし、山道に咲くさまざまな花たちは、全体として創造主をたたえ、私たちにも共に加わるようにと霊的なコーラスをしていると感じられます。（写真、文とも T.YOSHIMURA）